

# 大久野島毒ガス資料館

—毒ガス製造と使用の知られざる歴史



〒729-2311  
広島県竹原市忠海町 5491



## 地図から消された島

広島県竹原市たけはらの沖合いに浮かぶ大久野島は、一度は地図から消された島である。ここにはかつて、陸軍の毒ガス工場が置かれていた。

工場が稼働を始めたのは一九二九(昭和四)年。島内にある毒ガス資料館には、一九三一(昭和六)年の地図と、一九三八(昭和一三)年の地図が並べて展示されているが、前者にはある大久野島が、後者では、周囲の海域ごと切り取られたように空白になっている。毒ガスの製造は軍事機密であり、戦争が終わるまで、島の存在ごと隠されたのだ。

大久野島を訪れるのは初めてだった。広島空港から車で三〇分ほど走り、瀬戸内海に面した忠海港ただのうみへ。そこから連絡船に乗って約一五分、島の東岸にある栈橋さんばしで下船すると、たくさんのウサギたちが集まってきた。

現在の大久野島は、ウサギの島として知られている。島内で自由に暮らすウサギの数はおよそ七〇〇羽。その愛らしい姿はインターネットを通して広く知られるようになり、国内外から多くの人が訪れる。今回の取材でも、島のあちこちで、持参した果物や野菜などをウサギに与

える観光客を見かけた。

この島に毒ガス工場があったことを知っているのと、かつて実験に使われたウサギの子孫ではないかという考えてしまうが、そうではない。戦時中、実験のためにウサギが飼われていたのは事実だが、現在いるのは、大久野島が一九六三(昭和三八)年に国民休暇村となってから観光用に飼い始めたもので、それが繁殖したのだという。

周囲約四キロの小さな島は緑におおわれ、瀬戸内海の眺めが美しい。いまは国立公園の一部になっているこの島に、毒ガスが作られていた頃の面影はもうないのではないかと思ったが、予想以上に多くの、しかも巨大な遺構が残っていた。

島には自家用車の乗り入れが許可されておらず、船を下りると乗り合いバスが待っていた。それに乗って、まずは毒ガス資料館に向かう。

ここには、大久野島でどのように毒ガスが製造されていたのかがわかる資料が展示されている。世界で唯一の、毒ガスに特化した資料館なのだという。大久野島の毒ガス工場について長年調査を行ってきた、元高校教師の山内正之やまうち まさゆきさんの案内で館内を回った。

最初に目を引かれたのは、工場で働いた人たちが使用したゴム引きの防毒服や防毒面、製造器具や保管容器などだ。これまで多くの戦争関連の資料館を訪れたが、見たことのなかったも

技術や知識を持つ工員だけでなく、各地から集められた徴用工や動員学生、勤労奉仕の人たちも作業に従事した。こうした人たちは危険性を知らされないまま、毒ガスによる傷害を受けることになった。

こんなにも危険な毒ガス工場が、なぜ、どのようにして大久野島に作られたのだろうか。大久野島でのフィールドワークのための冊子『おおくのしま平和学習ガイドブック』によれば、それは以下のような経緯だった。

第一次世界大戦では、欧米諸国が競って毒ガス兵器を開発・使用した。毒ガス戦を経験しなかった日本は、開発で欧米諸国に後れをとっており、一九一九(大正八)年、東京都新宿区百人町(戸山ヶ原)に陸軍科学研究所を設置して開発を進めることにした。

だが製造施設の建設準備を始めた矢先に関東大震災が起こる。これを契機に、もしもの事態に備えて、危険な毒ガス工場は首都圏から遠く離れた地方に作るようになった。

何が製造されるのかわからされないまま、軍需工場の建設に手を挙げた候補地の中から選ばれたのが、明治時代に要塞があり、砲台が設置されたことのある大久野島だった。島の対岸の忠海には、かつて軍の施設が作られたことで栄えた歴史があった。

島なので秘密が保ちやすい、毒ガスが漏れても周囲の被害が少ない、本土からあまり離れて

いないため労働力や資材が入手しやすい——そんな条件を備えていたのが大久野島だった。中国大陸へ毒ガスを持ち込むには西日本の方がよいという判断もあったといわれる。

大久野島で稲作や野菜作りに従事していた住人は強制的に移住させられ、工場と関連施設が次々に建てられた。毒ガスの製造が始まると、島全体が有毒な大気でおおわれた状態になったという。

#### 毒ガス兵器を使用した日本軍

大久野島で毒ガス製造のために働いた人は、のべ六七〇〇人にのぼる。その中には、動員されて島に派遣された一三〜一四歳の学徒一〇〇人も含まれていたという。多くが戦後も後遺症に苦しめられ、慢性気管支炎、肺気腫、肺炎、肺がんなどが多発した。だが、毒ガスによる健康被害の実態が解明されて救済措置が取られるまでには、長い時間がかかった。

「症状の重い人は、戦後、次々に亡くなっていきました。毒ガスによる傷害で仕事ができず、困窮して自殺した人もいます。しかし国からは何の補償もなかった。被害者が団体を作って陳情し、広島医科大学の医師の尽力もあって、ようやく救済が始まったのです」

そう山内さんが説明してくれた。

軍属として工場で働いた人たちには一九五四(昭和二九)年から公的な救済が始まったが、徴用工や動員学徒、勤労奉仕などの民間人に対して医療手帳の交付と医療費の支給が行われるようになったのは、一九七五(昭和五〇)年のことだ。国からの命令で作業に従事したにもかかわらず、患者として認定されるための条件はきびしかった。

国が毒ガス製造に携わった人たちの被害をなかなか認めようとしなかったのは、旧軍が毒ガスを大量に製造し、戦場で実際に使用していたことを公にしたくなかったからではないかと山内さんは言う。

これまで私が知らなかったことの第三が、この「日本軍が戦場で毒ガスを兵器として使用していた」ということだった。

日本軍が毒ガスを使用したことは隠され、長いあいだ国内でも海外でも知られていなかった。近現代史が専門で、日本の戦争責任について研究してきた中央大学名誉教授の吉見義明氏でさえ、へかくいう私自身も、日中戦争や第二次世界大戦で日本軍も毒ガスを使用しなかったという説がある時まで信じていた(『毒ガス戦と日本軍』岩波書店)と述べている。

事実があきらかになったのは、一九八三(昭和五八)年に、当時立教大学教授だった栗屋憲太郎氏が、ワシントンのアメリカ国立公文書館で「支那事変ニ於ケル化学戦例証集」と題された

書類を発見したのがきっかけだった。そこには日中戦争の開始から一九四二(昭和一七)年まで日本軍が中国各地で行った毒ガス戦五六例の内容が記述されていた。

資料館には、表紙に「極秘」の印が押されたこの例証集のコピーが展示されている。日本軍による毒ガス使用の決定的な証拠となったこの書類が発見された後、日本軍の毒ガス戦に関する多くの資料が国内外で発掘された。

敗戦時、日本軍は中国各地に毒ガスを遺棄した。そのために現在に至るまで現地の人々の健康被害が続いていることも資料館の展示では解説されている。建築や道路工事の現場では死亡事故も起きているという。こうした加害の側面を忘れてはならないと山内さんは言う。

軍が中国に残してきた毒ガスを廃棄する責任が日本にはあり、毎年、多大な処理費用を負担している。二〇二二(令和四)年度の政府予算案を調べてみると、「遺棄化学兵器廃棄処理事業費」として、六〇〇〇万円余りが計上されていることがわかった。すべての毒ガスが処理されるには、まだ長い年月がかかる。

#### 廃棄処理の難しさ

資料館を後にして、山内さんの案内で島内を巡った。毒ガス工場があったあたりは、現在、

国民休暇村の敷地になつてゐるが、研究室や薬品庫、検査工室の建物や、猛毒イペリットの貯蔵庫跡が残つてゐる。そのほかにもあちこちに、倉庫や貯蔵庫、タンク、防空壕ぼうくうこうなどの遺構があり、明治時代の砲台の跡も残つてゐる。中でもその巨大さに目を見張つたのが、棧橋近くの発電場跡と、島の北部にある長浦毒ガス貯蔵庫跡だ。

発電場は工場に電気を供給するために作られたもので、八基の発電機の総出力は三四〇〇キロワット。三階建ての高さがある吹き抜け構造で、太平洋戦争末期には、天井の高さを利用して、ここで風船爆弾の気球部分の最終仕上げが行われたそうだ。戦後は米軍の弾薬庫として使われた。

長浦毒ガス貯蔵庫は、島に多くあつた貯蔵庫の中でも最大のもので、見上げる威容は要塞のようだ。内部には一〇〇トンのタンクが六基あつたという。

大久野島では、戦後、進駐してきた連合軍の指示のもと、日本人の作業員によつて、約一年をかけて毒物の処理が行われた。薬品で消毒したり、太平洋の沖に沈めたり、火炎放射器で焼いたりしたという。

この貯蔵庫でも、タンクの毒物を抜き取つた後、焼却処理が行われた。大型の火炎放射器で貯蔵庫の内部を焼いている当時の写真を山内さんが見せてくれたが、ものすごい炎に驚かさ

た。貯蔵庫内部のコンクリートの壁面にはいまも黒い焼け焦げが残つていて、毒ガスの処理作業のすさまじさの一端がわかる。

こうした戦後の作業でも、事故で死傷者が出たり、作業員が後遺症に苦しめられたりした。

島の土壌の一部が汚染されたこともわかつてゐる。

この島に来るまで知らなかつたことが多いと書いたが、毒ガスの廃棄処理の難しさと、被害の期間の長さもそのひとつだ。こうしたことを知ると、原発事故との類似点について考えざるを得なかつた。

大久野島へ工場を誘致した人々は、地元の経済にプラスになると考えた。そのときは毒ガス



大久野島で最大の長浦毒ガス貯蔵庫跡

## 予科練平和記念館

—大空に憧れた少年たちの「特攻」—



(提供：予科練平和記念館)

〒300-0302  
茨城県稲敷郡阿見町廻戸 5-1



長浦毒ガス貯蔵庫での火炎放射器による除染作業(1947年3月20日撮影、オーストラリア戦争記念館コレクションより)

工場であることは知らされておらず、一帯の人々がここまで危険にさらされるとは思っていなかったのだ。だが軍の施設によって潤ったのは一時期で、その後は長く健康被害が続き、しかも補償には高い壁があった。国としても、国内外での廃棄処理事業で、現在に至るまで高い代償を払い続けている。

毒ガスを含む化学兵器が、現在進行形の問題であることも忘れてはいけない。ロシアのウクライナ侵攻においても、当初、ロシアによる毒ガスの使用が危惧され、それはいままも払拭されたわけではない。これからの戦争は、核だけでなく、化学兵器も大きな脅威であることを、私たちは目の当たりにしているのだ。